

福井大学学術交流協定校への派遣留学（交換留学）月例報告書（11月分）

国際地域学部 3年 高橋大輔

留学先：ヴィリニウス大学 / リトアニア

11月分の月例報告書

こんにちは。リトアニアのヴィリニウス大学に在学中の福井大学国際地域学部 3年 高橋大輔です。交換留学開始から 10ヶ月目の報告をさせていただきます。

まずご報告しなければいけないことがあります。留学中に本来あってはならない“三人部屋の住人全員日本人”という状況を一度回避したが防ぎきれず、遂に最後の一人を迎え入れてしまいました。これについて、さすがにまずいだろうと寮の管理人にも相談しましたが、Olandu 学生寮（最高の寮として有名）で空いている部屋が自分達のところしかなく、また、その新しく来た日本人も、はじめに入れられた Sauletekio 学生寮（最悪の寮として有名）が嫌で、これまで格安ホテルをずっと転々としていたために資金が底を尽きそうということで、受け入れることとなりました。結果として、彼との出会いが私の人生を多少なり変える可能性を秘めているのが可笑しなところではあります。



目次

1. 妄想
2. 知らないは罪
3. イケメンは正義

1. 妄想

妄想が心の支えになりました。お金さえあれば欲しい物は何でも手に入る母国の環境とは異なり、あまり親しみのない言語が使われている国に住んでいると多くの人にとって必要な情報へのアクセスは格段に難しくなり、欲しい物も中々手に入りません。私はリトアニア語での情報収集が出来ないので、思うようにこだわりのある買い物が出来ません。

そこで私は妄想をすることにしました。自分にとっての最高の物を日本語のウェブサイトで見つけても今すぐにアクセス出来ない状況下だからこそ、帰国してからそれを買って何をするのか、何が出来るのか、どのように使っていくのかを頭の中でイメージ・記録することによって、一時的に満足感を感じて「買いたい!!」欲求を抑えて、さらにこの思考を定着させることが出来れば、欲しい物は何でも手に入る環境にいても本当に必要な物を見極めて無駄な出費も無くすることができると考えました。思い返せば衝動買いの多かった自分にとってこれは良い考え方だと思います。

2. 知らないは罪

**レバノン**：ウクライナ人の元ルームメイトが別の大学に行くために部屋を出て行った後、そして日本人の現ルームメイトがやってくる前、私の部屋にはレバノン人のルームメイトが住んでいました。結局、一人暮らしのアパートを見つけるまでの期間だけの入寮で、二週間もしないうちにその人は出て行ってしまいましたが、それまでの間に時折「リトアニアはとても良い国だ。自分たちの国よりも遙かに良い」と私に言ってきました。彼の母国であるレバノンは、訊いたところによると政治家が国民から搾取するなどかなり混乱した状況にあるようです。

**ガーナ**：そのレバノン人の彼ともう一人新しく知り合ったガーナ人の男性と三人で一度 IKEA に遊びに行ったのですが、道中、ガーナ人の男性が「ガーナに縁の深い有名な日本人は誰か分かる？」と訊いてきました。私はガーナと日本の関係についてチョコレート以外全く知識を持っていませんでした。とても恥ずかしかったです。ガーナと縁のある日本人は野口英世ですが、義務教育で習ったはずなのに、私はこの偉人が何を成し遂げたのかも危うく忘れてしまうところでした。日本では千円札を使う度にお目にかかるのに、いつの間にか物事を調べる好奇心もなくなっていました。

**コロンビア**：同様に、コロンビアの友だちと初めて話したときも「コロンビアについて何か知っている？」と訊かれて、そのときも私は何も答えられず、彼が悲しそうな表情をしていたのを覚えています。後日、Facebook で見かけたのは、コロンビアでの教育をめぐる学生運動に関する彼の投稿でした。

**中東**：ルームメイトのレバノン人の彼だけじゃなく、同じ寮のフロアにはフラットメイトとしてトルコやイエメンから来た学生もいます。しかしシリア内戦に対する関心が今まで無かったばかりに彼らの心の内を推し量ることが出来ませんでした。もちろん同情のような感情を抱いて今まで通り接しないのは甚だ失礼ですが、“知らないは罪”ということがこの留学で実感しました。



※内容とは全く関係の無い写真



『社交辞令の文化に染められた心が浄化された後のジェンガ』

### 3. イケメンは正義

ある天気の良い日の授業終わり、小さな噴水が中央にある少し大きな通りの脇に立って何気にスマートフォンを触っていました。するとすぐ後ろ脇から綺麗とは言い難い身なりの中年男性が

スッと現れたかと思うと、すれ違い際にこちらの目を見ながら唾を私の足下に飛ばしてきました。幸いなことに、唾は私の服や靴には掛からず、その後その男性はすぐに去って行きましたが、明らかに私に対して敵意に満ちた視線を飛ばしていました。もちろん喧嘩を売られるような覚えは一切無いので当初何が起こったのか理解できず、その男性が唾を吐き捨てる際の音がプシュッだったことから一瞬投げキッスされたのかと思ってしまいました。そんなはずはないのですぐさま状況を理解しましたが、今度は心の中がひどくざわつき始め、“なぜその男性はこんなことをしてきたのか”というモヤモヤと、“なぜ何もしていない自分がこんなことをされなければいけないのか”という憤りが混ざり合って良い気分ではありませんでした。

そこで、普段はバスに乗って帰宅するところを、徒歩で少し遠回りをしてから帰ることにしました。広場のような開けた場所で散歩してみると荒れた気持ちは随分と落ち着きました。途中、ヨーロピアン風の男性が“Sorry for interrupt. Maybe you have a light?”と火の付いていない煙草を見せながら声をかけてきました。生憎ライターは持っていなかったのですが、私は、“でも話しかけてきてくれてありがとう。外国で話しかけてくれるだけで今のおれはとても嬉しいよ”と伝えてはいますが、心の中でそう思いました。

唾を道路に吐き捨てるのはどうかと思いますが、もしかしたらあの男性の人生に何かとんでもなくつらくて悲しいことがあったのかもしれないと考えると少しいたたまれない気持ちになります。彼からしてみればリトアニアという多くの犠牲を払いながらやっとの想いで独立を勝ち取った自分たちの国で経済的余裕を象徴するかのようアジア人の若者がスマホを弄りながら突っ立っているなんて状況を腹立たしく思うこともあるのかもしれないと思いました。唾を直接かけてこなかった辺りもまだ良心が残っていると感じるところでした。唯一、リトアニアに対する感情を汚した点だけは許せませんが、実際のところ結構イケメンだったので、今後も良い経験と考えてリトアニアでの残りの生活も過ごしていきたいと思います。

※内容とは全く関係の無い写真

『リトアニアのクリスマスを先取る』

